宗像

毎月十五日発行
発行所
宗像大社
宗像会
〒811-3505 福岡県宗像郡玄海町
電話 0940－62－1311㈹
定価 一年送料共 1000円

昭和祭斎行

―鮮やかなみどりに包まれ―

激動の昭和の御世、六十三年の御在位の間、常に日本国の為だけに想いを馳せられ、国民の幸福と繁栄を希求続けられた、仁徳溢れる昭和天皇御生誕の日にあたり、「みどりの日」として祭日に制定された四月二十九日、昭和祭併せて第五十回全国植樹祭奉告祭が斎行された。

当日は天候に恵まれ、定刻午前十一時、拝殿大太鼓の合図にて祭典開始、太田宮司の昭和天皇の御聖徳を讃え、皇室の弥栄と国家・国民の繁栄と、来たる五月三十日に挙行される全国植樹祭に於いて、天皇・皇后両陛下がお手植えされる苗木の成長とを祈る祝詞が奏上され、巫女による浦安舞が奉納された。

「天地の神にぞ祈る
　朝なぎの海の如くに
　　波たたぬ世を」

は、昭和天皇が昭和八年に「万代に世界の平和の基を築かむ」と祈念された御製を神楽歌にし、皇紀二千六百年奉祝の記念に制定された。

昭和天皇は大東亜戦争終結後、「国がらをただ守らんといばら道すみゆくともいくさとめけり」とお詠みになられている。この歌は、当時の現状を憂えられたお気持ちである。有史以来連綿と受け継がれてきた我が国の国柄、それを護持する為に、たとえこの先どんな道が待ち受けてあろうとも戦を止めたいとの我が国、そして国民のことをただひたすらに案じられた大御心の切なる願いである。

「この身はどうなってもよろしいから国民を飢えから救って欲しい」と毅然とした態度をとられ、亡命・命乞いをせず、「身ヲ捨テ仁ヲナス」という昭和天皇のお姿に「世界最高の紳士」と感嘆された。

その昭和天皇が崩御されて早や十一年の歳月が流れ、現在全国各地で「みどりの日」を「昭和の日」と名称を改め、昭和天皇を偲ぶと共に昭和の苦難と復興を顧み、国の将来を考える重要な祭日としたいという動きがある。

前述した昭和天皇の数々の偉業をいつまでも後世に伝え残していく事が本当の意味での祭日であろう。

神具・装束
結婚式場用品
株式会社 井筒
福岡店 福岡市博多区東公園一－三三（〒812－0045）
電話 福岡（092）六五一－九四五六番
本店 京都市下京区油小路六条北入（〒600－8323）
電話 京都（075）三四一－三三四一㈹～四番
三四一－三三四一一番

宗像大社 奨学金受給奉告祭

昭和祭が斎行された四月二十九日、平成十一年度宗像大社奨学金新受給者二十名と父兄が参列の中、奉告祭が斎行された。

当大社の奨学金制度は、今上陛下のご成婚を記念して「郷土を愛し、将来の日本を背負う有為な人材の育成」を主旨に昭和三十四年十一月十一日に制定、翌三十五年四月二十九日、宗像地区各中学校を卒業し、高等学校・専門学校に進学した第一期生六名（各校一名）に奨学金を支給、以来今年度四十期生までの奨学生は総勢五百九十五名を数える。

奨学生の選定については、各中学校長の推薦によるものとしており、各校より二名ずつ計二十名の今年度推薦奨学生が選定された。

奉告祭当日、新奨学生並びに父兄が本殿に参集、先ず午前十一時の昭和祭に参列、代表者が玉串を捧げ全員で拝礼した。昭和祭終了後本年度より初めて拝殿に昇殿し、奉告祭が斎行され、宗像大神に立派な社会人となるよう勉学に勤しむことを誓った。

尚、新奨学生左記の通り

――◇――◇――

第四十期奨学生

草野　隆則（大島中　卒）
福崎　美幸（　〃　）
貞兼　正規（玄海中　卒）
山路　啓輔（　〃　）
上田　稔（津屋崎中卒）
山田　優美（　〃　）
白石　有（福間中　卒）
末吉　昌子（　〃　）
篠原　涼二（河東中　卒）
宮崎　穂波（　〃　）
秋吉　高志（日の里中卒）
下平　美香（　〃　）
吉田　華代（中央中　卒）
武田美小貴（　〃　）
熊倉真理恵（城山中　卒）
今田佑香里（　〃　）
松田　秀範（福間東中卒）
鐘ケ江由希（　〃　）
中村沙綾（自由ケ丘中卒）
藤野稔美子（　〃　）

※来月号より宗像大社奨学生のたよりを数名ずつ紹介致します。

五月・浜宮祭斎行

去る五月五日、「子供の日」に神郡宗像に初夏を告げる五月・浜宮祭が執り行なわれた。

先ず午前十時三十分、神湊の浜宮に於いて太田宮司以下神職六名奉仕のもと浜宮祭斎行、宮司祝詞奏上に続き、神湊区長梶木幸夫氏を始め、責任役員、氏子会会長などが、次々に玉串拝礼を行った。

続いて祭典は、釣川対岸の五月松原の五月宮に移った。祭場には社殿はなく、大きな神籬の前庭に神饌をお供えし午前十一時、江口区長石松宣勇氏、玄海少年自然の家所長国武康友氏、地元総代など外多数参列の下厳粛裡に斎行された。

特にこの両宮の神饌には古式に則り、赤飯・粽・ガメの葉饅頭・菖蒲酒といった端午の節句ならではの季節物の神饌がお供えされた。両宮の祭典が終了した後、

当大社五月賚にて直会が催され、楢の若葉が敷かれた折敷に盛られた赤飯・ガメ煮・膾・粽・ガメの葉饅頭の御膳を、栗箸で戴きながら、菖蒲酒を飲み交わし、神人和楽の一刻を過ごした。

そもそも、この祭典は、平安時代の文献に記され、中世に入り宗像大社の隆盛と相俟って盛大に斎行されるようになり、浜宮、五月宮の祭典は古来より秋の放生会とともに五月会として知られた。今日では、浜宮は石祠・五月宮は神籬という形をとっているが古来昔、海上が重要な交通路であった頃は釣川河口にあって、重大な意味をもつ祭儀が盛大に行われていたのである。

古記には大社縁の摂末社の神輿がここに集い祭りを行ったことや、ここで祓いをうけ辺津宮に参集したことなども見え、祓社としての由緒もあり、この古事を今に伝え毎年釣川を挟んで対する両宮に於いて当大社と両宮の氏子住民を挙げての祭典が行われているのである。

又、この五月祭は、古くは農耕儀礼の祭として始まったが、時代の変遷と共にある時は諸社の集合する大神事となり、ある時はわずかな氏子によって祭儀が営まれたこともあった。しかし祭の精神はその中に脈々と受け継がれてきたのである。

又同日、当大社の末社の一つであり、玄海町江口に鎮座する辻八幡神社の境内に鎮まる、五月社に於いても五月祭が斎行され、地元の人々が多数参列され、祭典と楽しいお座が開かれ、氏子中の安全と繁栄が祈願された。

余滴

緑の美しい季節となった。野も山も新緑に輝いている。石にも薄い緑色に輝く「翡翠（ヒスイ）」と呼ばれる美しい宝石がある。

この「翡翠」は、古代祭祀遺跡や王族の副葬品の中から多く発見される。当社「沖ノ島」祭場にも多くのヒスイ勾玉が捧げられ、古代人の目にも美しい宝石として珍重されていたと思われる。

漢字で書く「翡翠」は艶やかな羽をもつ「カワセミ」の異称で翡は雄を、翠は雌を言う、とコラムにあった。清流の樹影より小魚を狙うあの美しい小鳥カワセミの姿を思い出し、なるほど鳥類の「ヒスイ」であると感じた。ヒスイの持つ美しい輝きと多彩な色彩をもつカワセミには「翡翠」と表現するに相応しい感がする。

ヒスイは古代より祭具や装身具に利用され、現代でも女性の指輪等として輝いている。新潟県柏崎市の大宮遺跡（五、五〇〇年前）から出土したヒスイのかけらが日本最古のものと言われる。「翡翠」には硬石と軟石があり、一般的に硬石をヒスイと呼び珍重され、半透明の緑色を持つ美しさは人々のよく知るところである。ヒスイは多く玉（勾玉）となり祭具に使われ、縄文期頃からすでに使用されている。また、代替品として碧玉や蛇紋岩・滑石等で作られた勾玉も多い。

新潟県糸魚川のヒスイは特に珍重され、縄文期中頃の遺跡から北は北海道知床半島の斜里町から、南は鹿児島市から出土していると聞いて驚いた。

沖・中両宮春季大祭

―好天に恵まれ盛大裡に斎行―

陽光ふり注ぐ絶好の祭典日和に恵まれた四月二十日、沖津宮・中津宮両宮の春季大祭が厳粛に斎行された。

大祭に先立ち、二十八日二十九日の二日間に亘り、沖・中両宮奉賛会、同敬神婦人部等の奉仕により大祭に向けての諸準備作業が行われた。

二十九日午後三時、地主祭を斎行、同五時より、沖津宮遥拝所にて沖津宮背宮祭を中津宮にて中津宮背宮祭を各々斎行し、明日行われる両宮の春季大祭が無事斎行されるよう祈念された。

新緑鮮やかな三十日午前八時三十分、宮崎区に鎮座する厳島神社にて春季大祭を斎行、海上安全と今年の大漁を祈念した。

続いて同九時、沖津宮大祭が、奉賛会、地元氏子多数参列する中、沖津宮へ敬虔な祈りが捧げられた。同九時三十分、御嶽山頂に鎮座する御嶽神社にて春祭を斎行、宗像大社責任役員、宗像大社氏子六代表外農業従事者、氏子多数が参列し、本年の豊作が祈念された。

午前十一時、島内外の氏子崇敬者が多数参列の中、中津宮春季大祭が斎行された。

太田宮司が皇室・国家の安泰と弥栄、更には海上安全と漁業繁栄、五穀豊穣を祈念して祝詞を奏上、続いて村内氏子を代表して氏子奉幣使・沖西明人氏が奉幣詞を奏上、次に巫女による浦安舞が奉納された。

宮司、氏子奉幣使が玉串拝礼を行い、続いて佐藤奉賛会長、氏子六代表、杉田村長、平田大島漁業協同組合長を始め、各代表四十余名が玉串を捧げ、大神の神恩に感謝し、祭典は滞り無く終了した。

祭典終了後、感謝状贈呈式が行われた。本年は特に、中津宮神徳宮揚功労者として北九州市小倉北区の藤島敏行氏と宗像市の㈱城山家具代表取締役社長寺田修氏の両氏に永年に亘り、中津宮の正月祭、節分祭に寄与されたことに対し、宮司より感謝状と記念品が手渡された。この後、昨年中に沖・中両宮の御神前に度々献魚された方々にも、同様に感謝状と記念品が贈呈された。

また午後一時三十分より奉納子供相撲が境内土俵で行われた。取り組みは大島小学校一年から六年までの男女約六十名で行われ、詰めかけた大勢の父兄等が観戦し、応援の喚声が中津宮境内に響き渡った。

神賑行事も午後三時頃に終了し、沖・中両宮春季大祭は好天に恵まれ、滞り無く無事盛大に終了した。

中津宮神徳宮揚功労者
感謝状贈呈者

北九州市　藤島　敏行
株式会社　城山家具
代表取締役社長寺田　修

平成十年沖津宮・中津宮両宮献魚者感謝状贈呈者名

沖栄水産　代表沖西　敏明
春日丸組　代表佐藤　隆二
宮地丸組　代表豊福　敏博
海宝丸　福崎　久幸
沖一丸　沖西　敏明
春日丸　佐藤　精一
常吉丸　古賀　理
坂嘉丸　坂口　嘉一郎
成幸丸　藤島　登志男
威徳丸　丸井　房芳
宝栄丸　佐藤　守
友栄丸　上野　和行
生漁丸　上野　美実
健幸丸　田志　正弘
大福丸　古賀　政治
大成丸　上野　幸誠
豊丸　豊福　正人
蛭子丸　福崎　定生
威徳丸　丸井　定

順不同敬称略

出光興産店主室 第五十八期教育宗像研修

四月十九日より四泊五日の日程で、出光興産の第五十八期店主室教育宗像研修が行われた。

この研修は毎年春秋の二回、中堅社員を全国各地より選抜、「真の日本人とは」を命題に四十五日間に及ぶ研修を行い、その総まとめとして最後の五日間を当社に於て研修している。

研修生を代表して四名の感想文を紹介致します。

一班　宮本公博
（出光石油化学千葉工場）

シーンと静まり返った暗闇の中に蠢くものは、木の葉が枝から離れ、木々とかすれあいながら落ちていく音だけだったと、こんな小説風な書き出しが、似合う高宮での鎮魂でありました。静寂と暗闇が自分自身の本当の心を浮かび上がらせ、本気で自分を振り返るという純粋な心持ちになったことは、人生の中でも幾度とない経験でありました。この体験を忘れずに事ある毎に自らを省み、行動を律することが出来る人生にしていきたいと思います。

辺津宮での研修では、若い神官さんとの話から神の前における人間の在り方を学びましたが、その中で我々と違った苦労話を聞き、「樹木は風雪に耐えて大樹になる」という言葉が印象に残りました。耐えてこそ次の一歩が踏み出せるということから弊社創業者の出光佐三店主が、「努めて苦労せよ」と言われたことを思い出した次第です。

私はこの研修を通じて人間として又日本人として本当に大切なものは何かということを教えられました。何物に対しても感謝するという気持ちは、現代の日本人が忘れてしまった心であり、取り戻すべき心であると思います。この宗像で学んだことを大切にし、次世代に今の自分の思いを伝えて行きたいと思います。それが今回お世話になった宗像や大島の方々へのご恩返しにつながると思っています。

ありがとうございました。

二班　遠藤博之
（出光興産中央研究所）

今回の研修に来るまではいわゆる神社、神道について私自身、あまり関心がなかったのが正直なところでした。しかし今回、日本の豊かな自然中で我々が古代から脈々と生きてきたこと、自然のあらゆるものに感謝しながら生きてきたことと自体が「神道」なのだということを理解することができました。そうすると、これまで意識していませんでしたが、私の心の底流にもずっと日本の「神々」が存在していたのだと感じました。

本殿、高宮での夜の鎮魂では我々の祖先がどのような気持ちで神と接していたかの一端を感じることができたように思い、感動しました。また、日々の生活でもこのようにゆっくり自分自身を振り返る時間を持つことが必要だと思いました。神前での作法も単に儀式的なことだけでなく、礼の仕方から立ち居振る舞いまで、実生活に即したものであることもわかり、大変参考になりました。

今回の研修では日本人が古来から大切にしてきたものを、たくさん教えていただきました。これらは今後の自分の人生のなかで活かしていきたいと思いますし、受け継いでいきたいと思います。最後にいきたいと思います。太田宮司様を始め宗像大社の皆様には大変お世話になりました。ありがとうございました。

三班　上田康平
（出光興産東京支店）

私にとって神または神社というものは、初詣等で手を合わせ、お願いするといった漠然とした存在でしかありませんでした。今回初めて経験しました「白衣白袴姿」「潔斎」「朝拝・日供祭」「清掃奉仕」「鎮魂」を始め、宗像大社の雰囲気と、神職の方々とのふれあいの中から神・神社の存在が身近なものになりました。

日本の文化・伝統というものを普段の生活の中から感じにくくなっている我々の日常では、あえてそれを求める必要があると思います。しかし形としての文化・伝統は知ることが出来ても、その心を感じるという経験はなかなか出来ません。宗像研修では「神を敬い、神に感謝する」という気持ちを心で感じることが出来た研修であり、私にとって意義深いものでした。

私の日常生活や仕事の中ではあっという間に過ぎていく時間が、宗像では実ゆったりと感じられました。この雰囲気の中で、自分自身の心の内面と向き合い内面に語りかけ、普段聞こえない自分の違った声を聞くといった感覚が経験できました。ここで、人間にとって大切な「まこと」「感謝の気持ち」をあらためて知り、自分自身に忠実に生きることを感じました。ここで感じたものを、これからの生活に活かし、実践してゆきたいと思っています。

四班　米満俊哲
（出光石油化学総合計画室）

私はこれまで宗像大社に参拝したことも無く、はずかしながらここへ来るまで、その由緒伝来や、位置づけなど知る由もありませんでした。今回、四泊五日という短い期間ではありましたが、太田宮司様はじめ神職の皆様からの貴重なご講話や説明を聞き、初めて宗像様の歴史や格式を知りました。

そして研修ではまず、初めて着る白衣白袴、これを着ただけで気持ちが引き締まるように感じました。境内清掃でのあの、心が透きとおるようなすがすがしさ、何度も繰り返し練習した朝拝での献饌・撤饌の作法、最初は文字を読むのがやっとだったのに何度も声を出して読んでいるうちになんとなく意味が解りかけたように感じた大祓詞奏上、足の痛みが気になって自分を振り返る余裕すらなかった鎮魂…。その他すべてが貴重な体験であり、自分が日本人であることを強烈に意識するものでした。

また、日本一の「お宝の山」を保管する神宝館、古代から続いている宗像様の歴史を証明するとともに、その学術的価値に驚嘆しました。失礼ながらこんなところに、こんなものが、こんなにも、と。

すべてが初めての事ばかりだったのですが、宗像様の歴史や格式を学べば学ぶほど、そこまでのお社ならば逆にもっともっと多くの人に知ってほしいし、参拝もしてほしいと思います。伝統を守り継いでいけば良いというのはその通りなのですが、より多くの人に“日本人としての心”を伝え、広めていくような方法も必要なのではないかと思います。

そして私は、今回貴重な体験をさせていただいた一人として、身近な家族そして子供にそのよき伝統と日本人としての歴史・道徳を伝えていく義務があることを肌で感じ、それを実行していきたいと思います。

一誌一話 (77)

古代豪族の奥津城 (1)

樂　杏子

古墳時代が始まる四・五世紀の頃になると、いままで各地に群雄が割拠していた日本は、大和王権による国家統一へと歩を進めてくる。この頃より各地の埋葬施設も大型の高塚墳へと移行していく。なかでも玄界灘沿岸では、いち早く大型の前方後円墳が出現してくる。

これは、玄界沿岸に居住している豪族が、対外交渉に係わる大和朝廷の内局にも参入していった表れであろう。

日本書紀によると、仲哀天皇の時、三六九年　任那（みまな）＝伽耶（かや）諸国＝に日本府成立。とある。この記述は大和王権による朝鮮半島への軍事的介入の記載であると言ってもよい。

この頃より玄界灘の真っ只中にある小島・沖ノ島では、大和朝廷による国家的祭祀が始まり、遣唐使が中止されて後の十世紀初頭までと、外交安堵の平穏を祈る海鎮めの祭りが続けられている。

記紀にも記されているように、宗像君が祀る神々三女神は、対外交渉路である海北道を守護していく国家神として、早くも位置づけされると同時に、沖ノ島での大祭祀が繰り返し度重ねて行われてきた。これは、玄界灘をいち早く領有していただけでなく、航海術に長けた古代宗像族の活動の表れだけでなく、大和朝廷が対外交渉での要衝とした重要な拠点としての役割を意味している。

玄界灘を見守る様にして、古代の宗像族をまつる大小の墳丘が二〇〇基程造られていた。

神湊から始まり勝浦→奴山→新原→大石→須多田→在自→宮地嶽大塚古墳へと一直線上に南北八キロに渡って並び立っている。

この津屋崎の海岸線一帯に連なる古墳群が、宗像君の奥津城（おくつき）である。

いまの海岸線は、昔より北へ海の方に一キロ程進んできているが、当時の津屋崎の海岸線は、北九州の若戸大橋から津屋崎へと継ながっている、産業道路が走っているあたりである。

古墳群は、当時の海岸線に沿った産業道路沿いより内側に、山に向かって築かれている。その重なりあった姿が道路沿いに続き、神湊より宮地嶽まで目に入れることが出来る。

玄界灘を望む台地上の二〇〇余り古墳の中で、約一割にあたる十九基が前方後円墳として築かれている。なかでも古墳時代初期の造りと言われる、帆立貝式や柄鏡式の前方後円墳も存在している。

前時代の弥生時代に、奴国と言われた福岡平野や、伊都国であった糸島平野でも、前方後円墳は二十二・三基である。

このことからしても、すでに宗像地方でも「クニ」を形成していた玄界沿岸の諸豪族と、同等の生活形態が整っていたことが推察できる。一方倭国への入り口玄界灘を一早く治めた、海人族とも言われる宗像族に対する、大和朝廷の力の入れかたを窺い知ることが出来る。

出光大分地熱㈱ 安全祈願祭斎行

四月八日、大分県久重町にある出光大分地熱滝上事業所にて創業三周年並びに業務の安全を祈る祭典が厳粛裡に執り行われた。

神島権宮司斎主のもと、祭員一名奉仕により熊谷社長他、役員関係者が参列し、桜花爛漫の中祭典は滞り無く終了した。

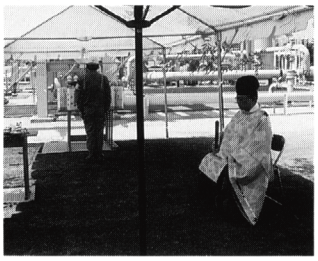
この発電所は事業用として九州では五番目、全国では十一番目の地熱発電所で、発電部門を九州電力、蒸気部門を出光大分地熱が担当し共同で運営されている。

発電所には七本の蒸気井があり、それぞれ深さは違うものの、最も深いもので二、七〇〇M、浅いもので一、一〇〇Mで、発電出力は二万五千KW。一軒の家庭で平均二KWの電気を使うとすれば、約一万二千五百戸分を賄うことができる。年間の発電々力量は約一億九千万KW毎時で、ほぼ四万四千KLの石油が節約できる。

火力発電は石油などを燃やして蒸気を作るが、地熱発電は石化燃料を全く使わず、地下から取り出した蒸気を利用するクリーンな発電方式で、火力発電のボイラーの役割を地球が果たしている。

地下の岩盤の中に閉じ込められたマグマの熱で高い温度になっている地下水を蒸気井で取り出して発電に使用し、蒸気を取り出した残りの熱水は再び地下へ戻している。

この様に地熱発電は地熱という自然の力を利用した発電方式で、国内の資源を有効に活用した環境に優しい施設であり、今後も活躍が望まれる。



主基地方 風俗舞保存会研修旅行

四月十一日より一泊二日にて主基地方風俗舞保存会研修旅行を行い、田中保政会長以下十名にて長崎県壱岐の地を訪れた。

壱岐は延喜式神名帳に記載された古社が多く、又考古学上も大変貴重な島である。

博多港よりフェリーにて出発し、到着後直ちに芦辺町に鎮座する壱岐一の宮として名高い住吉神社に参拝した。折しもこの日は春の大祭で、有名な壱岐神楽（四剣の舞）を拝観することができた。

壱岐神楽は秋の大祭には約六時間の太々神楽、春には三時間の太神楽があり、特に秋の神楽には真剣の太刀が使用され、又この神楽は、神主以外が行ってはならない習わしとの事である。住吉神社は神功皇后が外征から帰還の際、親祭があったという由緒を持つ全国住吉社で最も古社である。

夕刻、郷ノ浦町の宿には沖ノ島にて漁を行っている壱岐の沖ノ島船団の方々がかけつけて下さり、我々会員と懇親した。

翌日の島内観光には、漁師に紹介頂いたガイドの方より観光案内を賜り、名所旧跡を巡り壱岐の歴史の古さと先人の努力に感心し、又名ガイドぶりに一層楽しいバスの旅を過ごした。

昼食は、昨晩の壱岐沖ノ島船団の方々より新鮮な魚や名物のウニ飯他、真心からなる御馳走を頂き、一泊二日の壱岐研修を満足し、夕刻フェリーにて帰路についた。

壱岐船団の長嶋様外皆様には大変お世話になりました。誌上より厚く御礼申し上げます。

トヨタ自動車九州㈱ 前天候型グランド竣工清祓

去る四月十四日、トヨタ自動車九州㈱前天候型グランド（鞍手郡宮田町大字四郎丸）竣工清祓が執り行われた。

今回完成したグランドは主に同社陸上競技部の練習用グランドとして作られ、四〇〇Mトラック・六コース、一〇〇Mトラック・六コース、五〇〇Mトラック・二コースという大規模の前天候型グランドである。

また、先日新聞のスポーツ面で話題となったバルセロナオリンピック銀メダリストの森下広一氏を新監督として迎え、ソフト・ハード両面共に部の強化を計り、部員十一名の新体制でスタートすることとなった。

祭典はグランドに隣接するクラブハウス内で執り行われ、祝詞奏上に続いて斎主・森下監督・コーチ等が完成したばかりのグランドに向かい、大麻と紅白の切麻にて清祓がなされた。引き続きトヨタ自動車九州㈱武藤取締役総務部長以下関係者が次々に玉串を捧げ、今後の同部の活躍を祈念し、祭典は滞り無く終了した。

この新陸上部に対する期待は大きく、先ずは基礎を固め、ゆっくりと着実に成果をあげてこの期待に応え続けるチーム作りを目指すべく、適任の指導者を迎え、練習場も新設し今回の出発の日を迎えた。

森下新監督は、このグランドを将来的には地元の学生や同好者等が使用できるよう開放し、陸上競技の底辺の拡大・若年層の強化にも力を注ぎ、地域密着型のクラブを目指して行きたいと熱く語っていた。

宗像大社前駐在所だより 高齢者交通安全『いきいき200』

福岡県では高齢者（六五歳以上）の方を対象に交通安全講習を行い、二百日間の無事故を目指すコンクールを実施しています。

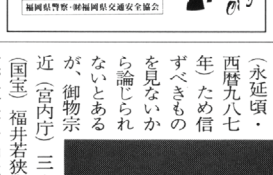
平成十年中の高齢者の交通事故死者数は一二五人で全死者数の三割強となっています。

交通事故の加害者・被害者にならないためにも、ご家族や友人を誘って交通安全講習を受講し、コンクールに参加して、皆さんと一緒に交通ルールやマナーを学んでみませんか？抽選で豪華賞品が当たります。

実施期間

平成十一年三月一日～九月十六日

※詳しいことは、最寄りの警察署でお尋ねください。



大社の奉納刀（五）

仙寿

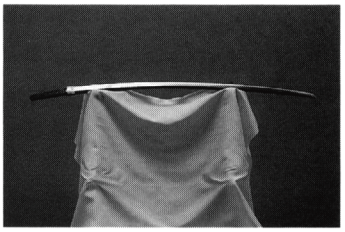
沖津宮御神器御神具帳に安永四年正月藩主黒田治之公沖津宮に太刀（銘宗近）を奉納するとある。現在「宗延作」（登録証銘）として展示中の刀がそれである。

山城国宗近は備前国長船、伯耆国安綱と共に平安時代の三名匠の一人であり、小鍛冶宗近と称した刀工が稲荷大明神の通力に援られて、宝剣「小狐丸」を鍛え上げ、一條院に捧げるという筋の能楽でも知られている神秘的な刀匠である。

昭和初期の刀剣書でさえも作者の時代が余りに古い（永延頃・西暦九八七年）ため信ずべきものを見ないから論じられないとあるが、御物宗近（宮内庁）三ヵ月宗近（国宝）福井若狭彦神社神宝、岐阜南宮神社神宝の四振の太刀が正真なものとして残されている。

当社の宗近は終戦時の混亂期に占領軍の摘発を恐れて、神社関係者に分散隠匿されていたが、昭和三十二年四月金象嵌銘来国光、吉則と共に無事返納されている。名刀還ると神社では大いに喜ぶと共に、その真贋の程を極めようと、出光美術館に鑑定を依頼した事が当時の書簡で伺える。

この刀は刃長六八・六糎、反り二・四糎と細身で小鋒、中反り高く殿上人が佩く様な優美な姿をしている。



藩主治之公が足利幕府以来、天下の五剣（鬼丸国綱、大典多光世、三ヵ月宗近、数珠丸恒次、童子切安綱）の一人である宗近の名刀を探し求めて、宗像大神に奉納した事に並々ならぬ崇神の念を抱かずにはいられない。戦後長足の進歩を遂げた鑑定法によれば、宗近とは言えないが当時の鑑識では宗近だったのであろう。

出光美術館からの返書では、識者に鑑定を依頼した所、宗近としての根拠が薄弱なのと、宗延作としても年代的に疑問があり神社所有に付き的確な鑑定をせぬ方が良いのではないかと結ばれている。

例え宗近でなくとも、黒田治之公の崇神の念に変わる事はないであろう。

鋒（きっさき）は小鋒、鉗（ぼうし）は掃きかけて返りは浅い、鎬地は柾目肌が著しく、平地は小板目肌良くつんで所どころに柾目肌が交わっている、刃紋は小沸出来、のたれ心の直刃で所どころに小互の目交りで金筋、砂流しが盛んに働き仲々の名刀である。

かなり研ぎ減っているのが惜しまれるが中心（なかご）柄の部分）には刀銘で宗□作とあり、目釘孔は三箇、中心尻は浅い栗尻である。浅学の私が見ても鎌倉時代を下らない名作と見受けられた。

第四五五回 宗像大社歌会詠草

大野展男選　毎月25日〆切

名古屋　小田　留子

捨てられバイクに芥からまりて川のひと処逆波の立つ

（評）雨後の風景であろうか、昨日までとは変わった川の流れに目をとめ「川のひと処逆波の立つ」と詠った作者は、物静かに不法投棄をとがめているのである。

大　島　越智　治子

山鳩のくぐもる声のひびきくるあしたの厨に石蹐を煮る

（評）石蹐は作者の摘んできたものであろうか、それを朝の厨で煮る作者の平穏な一日の幕明けである。くぐもる山鳩の声が平穏な一日の幕明けをうまく演出している。

大　島　杉田　禮子

寅さんの歌ながしつつ物売りの車は春の島の道ゆく

（評）島に渡ってきた移動販売車であろう。島の人には馴染みのある歌である。季はあたかも春、寅さんの歌を流す販売車の主の人柄も想像され楽しい一首。

鐘　崎　安永　久子

古里の父母が何処かにいるような祖碑のめぐりに鶯の鳴く

（評）祖碑は祖祠のことだろうか、このままでは祖碑と古里の父母の関係がはっきりしないうらみがある。ともあれ久々に詣でた墓地で鳴く鶯の声に父母と過ごした日々に思いをやる作者の感慨が詠われている。何歳になっても父母は懐かしい存在なのである。

在　自　佐々木和彦

早春を鳴く雉鳩を聴きながら松の保安林をしばしあゆみぬ

武　丸　中村さつき

東京より七ヵ月ぶりに曾孫きて土筆タンポポ採るとはしゃぐも

田　久　井上　光

坂上郎女の歌碑新しきあんずの里は春を賑ふ

日の里　石松　弘次

張り替えし障子に寄りている皺白く光れり春の日差しに

田　野　森　つるの

婦人会の手作り料理の接待に友と語らふ一日楽し

光　岡　竹浦　葛明

のどかさを象徴するがに小鳥等の囀り冴えて今日は始まる

光　岡　森田富佐子

仲良しの友に散歩を誘われて田舎の空気のうましと吸いこむ

自由ケ丘　細川　絹子

枯れ枝の先に萠えいづ牡丹の芽春雨にぬれあかく光れり

朝　野　藤井　浩子

遠足の子らがたらたら公園の葉桜並木の下帰りゆく

田　野　森　甲子

花終りいつの間に生り梅小さく頬にほんのり紅の色さす

吉　留　高山　信子

血をわかせ肉躍らせて学びゆく八十の吾その時若し

福　間　池浦千鶴子

摘みさたる土筆にさへも老若のあるを愛しむわれ老いそめて

原　町　八波　五月

散歩路に生えし土筆を娘が摘みて煮て呉るるなり楽し夕餉は

名古屋　小田　喜一

末黒野にはや青き芽の二分三分糸引く雨に束の間遊ぶ

福　間　中村　勇

庭に干す泥んこになりし作業靴土をおとしぬ乾くを待ちて

日の里　大和美由紀

古池の水音かすか聞こえ来る朧月夜の花にたたずむ

曲　天野　玲子

三本の入れ歯なれども口中に自己主張して言うことき かず

香　椎　板矢　美香

横たえし狭庭の柿の一もとも春の息吹きに新芽鏤む

土　穴　瀧口　敦子

朝日射し昨夜積もりし雪塊が屋根より落つる音響きをり

池　田　小田　イセ

急患のわれ運ばれて今日あるは家族の愛と神仏の加護

光　岡　四宮多惠子

春の風満喫しつつ窓に佇つ車社会に暫し目をやる

八幡西　有吉　陽子

想い出づ風呂焚きながら芋を焼き夕飯前に姉妹食べしを

光　岡　河村　久光

夜明けまえ山黒ぐろと連なりてそれの麓に街の灯の有り

宗像大社歌会
俳句作品集（四三）

自由ケ丘　細川　絹子

枯れ枝の先に炎の牡丹の芽

福　間　森　清

傘さしてしっとり濡れし春の雨

日の里　花田いつ枝

海見へて遠足の列乱れ初む

東　郷　吉武　湧泉

入学式銀輪連ねて颯爽と

東　郷　中野　きみ

野遊びや思はず歌う童歌

東　郷　吉田　衿子

藤の香のそよりと風に阿彌陀佛

東　郷　吉田　杏子

一湾に溢れることし春の潮

東　郷　三浦美千代

野歩きにさらりと出るよ故里言葉

東　郷　田中　雨葉

風を待ち風に預けて五月鯉

東　郷　木原　房子

深々と挨拶をして卒業す

（続）浜の寄物

いしいただし　136

大阪・千里の国立民族学博物館を辞し、新大阪駅に戻った。和歌山県・新宮行きの「スーパーくろしお」に乗車、目的地にはかねて一度見学したいと思っていた和歌山県東牟婁郡太地の「くじら博物館」である。

車窓からは桜が美しく、平地は白いえんどう豆の花が咲いていた。まだシーズンオフで人の移動もほとんどなく列車もすいていた。ビールなど飲みながら、車窓からの景色を楽しんだ。名所旧跡は車内放送で案内してくれる。

四時間少し、七時頃に新宮着、予約していたビジネスホテルに泊った。

翌早朝、熊野三山の一社、熊野速玉大社（熊野速玉大神）に参拝、境内には熊野御幸の上皇の参拝回数を刻した碑がたっている。白河上皇十二回、鳥羽上皇二十三回、後白河上皇三十三回、後鳥羽上皇三十八回等々。

熊野詣は、蟻の熊野詣といわれ、蟻の行列のように陸続と細い厳しい山路を踏み越えながらの参拝であった。「熊野へ参るには紀路と伊勢路とどれ近し、どれ遠し、広大慈悲の道なれば、紀路も伊勢路も遠からず」「熊野へ参らむと思へども、徒歩より参れば道遠し、すぐれて山峻し馬にて参れば苦行ならず、空より参らむ、羽賜べ若王子」（梁塵秘抄）

徐福が始皇帝の命を受け東方へ仙薬を求めて上陸し、生涯をとどした伝説の地には、いま極彩色の桜門がたっている。浮島も通り過ぎただけである。

新宮から那智へ、駅近くに補陀洛山寺がある。「ふだらくせん」とはインド南海岸の山で、観音菩薩の住処とされる。伝説では五代孝昭天皇の御代、この地に七人のインド僧が漂着、六人は帰ったが、残る一人が那智の滝のところで修行をした。後に裸行上人と呼ばれ、滝壺から長さ八寸の黄金仏、如意輪観音を掘み出し、その後七百数十年生きたのち、再び浜辺から船出して、海の彼方の理想郷ふだらく島に旅立ったという。

那智は補陀落へ渡海するところとしても知られる。

貞観十年（八六八）十月補陀洛山寺の慶竜上人からはじまり、「熊野年代記」では十八世紀まで八百五十年間数十人に及ぶ僧たちが渡海したという。裏山に入定僧の供養塔がひっそりとある。

太地駅からはバスかタクシーでしか「太地町立くじらの博物館」には行けないので、便利はあまりよくない。くじら博物館は昭和四十四年四月に開館しているからもう三十年、建物も古く、全体的に薄暗い。

館は三階で、一階は鯨の骨格標本が所せましと吊り下げられている。セミ鯨、イチヨウハ鯨、コク鯨、シャチ、ホッキョク鯨等で圧巻である。壁面には太地浦沖古式捕鯨のジオラマがある。二階からは目の高さで見ることができ、壁側には生物学的に見た鯨類として、内臓・鯨歯・鯨ヒゲ・イワシ鯨頭骨やマッコウ鯨頭骨・寄生生物・捕鯨巻物も展示されている。三階は、勢子船とセ鯨の模型があり、捕鯨の様子が再現されている。古代捕鯨用具や、巻物、捕鯨用印旗等が展示されている。セミ鯨の模型は一九六八年オホーツク海で捕獲された実物から石膏型にとり、グラスファイバーとプラスチックで作製したものである。迫力もあり、鯨は地球上最大の動物で、その大きさに圧倒される。太地は古式捕鯨の発祥地でその歴史が既に十一世紀初頭、「大魚があがり油三百樽を得た」記録がある。寄り鯨の処理する技術があったようである。江戸時代には組織的に鯨をとる組がつくられ、近代まで捕鯨活動が盛んに行われたところである。

館を出た奥にマリナリウムがある。太地周辺の魚から黒潮の魚たちが泳いでいる。太地で漂着したものの展示したコーナーがある。丸木舟、ニューギニア方面のものと思われる面とカーピングに興味を覚えた。タカラガイ入りの目、特徴ある鼻がそれである。

植物ではココヤシ・ニッパヤシ・ゴバノアシ・オオミフクラギ・スダレヤシ・タコノキがあった。オウムガイは一九七五年十一月二十日、神ノ浦に漂着したものであった。

〈太地に漂着したお面〉

青柳種信著　平野国臣写
瀛津島防人日記（下巻ノ八）

いづれの御世の事にか有けん、韓国より鐘をもてわたせしを、爰にて海に打はめたりとなもいふ。

その鐘のあたりは、いまもさだかにそれぞとしらると、海人の指さしてをしゆ。宗像朝臣興氏といひし人、文明五年（一四七三）に大鐘をとらんとて、人をおほくつどへ、舟をあまたうかべ、海士をいれて鐘に大綱をかけて、曳きあげんとせしか共あがらず。俄に風雨烈しく大濤起こりて、海の中、鳴はためきければ、皆人かしこみて、とる事やみぬといへり。其後、慶長九年（一六〇四）、前国主源長政朝臣地島の波止を築玉へるちなみに、此かねを揚げんとおぼして、爰に来給ひ、新たに波頭を築きて、舟どもおほくつどへて引玉へどもあがらず。

二日三日経たりしに、又さきの如く風吹いて、雨はげしく波たちさわぎてければ、遂に鐘をとる事をやめ玉へり。

かの万葉集に、鐘（金）の岬としもよみて、此時既に地名としもなりにたれば、唯里の詞にのみ残りて、いづれの書にもみえぬこそくちをしけれ。

鐘崎の里の上なる高山を湯川山といふ。沖つ島より見渡さる、所なればかきつく。

辺津宮は、神湊の巽一里、田島村にあり。

宮所は、山あひの田の中に在。其地広く大にして、木立物ふりたり。御まへに御池あり。橋をわたせり。

御社は乾の方遥かに大嶋に向へり。本殿・拝殿・渡殿・神楽殿・御炊屋・宿直所・舞台・（鐘楼）・宝蔵・経蔵未社二十五社（昔は七十五社有て所々に散在せり。近世社の内に移して二十五社につつる。）

今の世に拝み奉るにも、尋常ならぬ宮のたゝずまひ、ましてむかし、御社の栄へまし、時は、とおもひやられ侍る。

此御社には、田心姫命を主と祀りて、餘の二柱は（御社の）左右に別殿におはします。

故郷の神々

神祭りの島　沖ノ島（二）

玄界灘の真っ只中に浮かぶ孤島沖ノ島は、五千年も前の縄文時代前期頃から古代人の生活の場として利用され始めてきた。

島のあたりが丁度、南からの「対馬暖流」と北からの「リマン寒流」とが交差する所である。この様な地域では暖流魚と寒流魚とが往き交う地点でもあり、多種類の魚が多量に生息している最良の漁場である。

狩猟漁労を生活の中心としていた古代の人々は、波に乗り魚を追い続けて島へ近づき漁をして、ふる里への土産として沖ノ島近郊の魚を持って帰ったであろう。

やはり沖ノ島は古代からの海上の目標であった。

沖ノ島では、南岸の一ヵ所だけに砂地が出来ている。そこは「御前（おまえ）」と呼ばれる所で、神様の面前であることを意味している言葉である。今も人島者の禊の場である。

隆起活動により日本列島が誕生してきた二百万年前の昔に、沖ノ島も同時に隆起したと言われている。島の地形から見ても、御前の所だけが最初から砂地を形成していたようである。ここだけが島の生成時から上陸可能な地点であった。

この禊場から一段と高い崖の上へと登って行くと、御高（おたか）と呼ばれる標高十メートルを計る平坦地へと出る。

ここからは宗像地方だけでなく、東は山口の豊浦海岸、西は博多・糸島、遠く壱岐・対馬が一望のもとに見ることが出来る。

この地に昔は沖津宮社務所があり、旧社務所前遺跡と呼んでいる。縄文時代前期（約五千年前）からの古代人の生活が偲ばれる所である。土の中からは、縄文時代人と弥生時代の人が使っていた土器・石器と一緒に、魚骨・貝殻・海獣の骨などが多く出土してくる。

沖ノ島が人々の生活の上で直接使われだしたのが、約五千年前（縄文前期曽畑式土器＝熊本県宇土市曽畑貝塚＝出土）頃であった。

このお高からは、九州各地の古代遺跡からの出土土器の他に、山陰地方や瀬戸内海地方のほか、朝鮮半島製の無文土器も出土してきている。

お高からの出土品から見てくると分かる様に、狩猟漁労の生活時代からすでに潮流にのり魚を追いかけ、沖ノ島を目標として人々は活動し、島へ渡ってきたことが明白である。

約二千年前の弥生時代の島国日本のことが、中国の歴史書の中に記述されている。

前漢代の「漢書地理志」によると「楽浪（朝鮮半島の一郡）海中に倭人あり、分かれて百余国となす」とある。

後漢代の頃（西暦五十七年）の「後漢書東夷伝」には「倭の奴国王朝貢し、光武帝より印綬を受ける」

二三九年の「魏志倭人伝」によると「倭人は帯方の東南大海の中にあり、昔百余国今三十国」と記録されている。

これ等の書物は、弥生時代の中期から後期の日本（倭）を外国である、中国大陸からみた当時の所見である。外国との行き往も始まっていた。〈松〉

(47)